



— 第15回 —

新山 多恵子さん

PROFILE

十和田市出身。昭和63年、結婚を機に岩手県九戸郡野田村に居住。昨年3月11日の東日本大震災により自宅を流失。自身も津波に流されたが、奇跡的に一命を取り留めた。震災後は長男と娘とともに十和田市に移り住む。夫と次男と義父は岩手県久慈市に居住し、離れて生活を送る。十和田市役所に臨時職員として勤務。47歳。



あれから一年、生活は一変した
でも「今」を生きる命がある

「まさか、あんな津波が来るとは誰も思わなかった」と、震災を振り返るのは岩手県野田村で被災した新山多恵子さん。

大きな揺れのあと、義父と近所の住民はすぐに高台へ避難した。しかし、中学生の娘の帰りを待っていた新山さんはすぐに避難しなかった。夫が迎えに来たときにはすでに遅かった。

目の前には、防潮堤の高さをはるかに超えた津波が迫っていた。防潮林が1本ずつなぎ倒される。少しでも高いところへと夫とともに2階に駆け上がる。窓から見えたのは、蛇が鎌首をもたげたような茶色く淀んだ壁―津波だ。とつさに夫の手を握りしめた。ミシミシと家が波に抗う音がする。瞬間、背後から勢いよく濁流にのまれた。つないでいた手が離れた。

どれくらい流されたのだろう。体が浮いて、水面から顔を出した。近くに浮いていた大型車のタイヤにつかまる。あとから、300m先の地区まで流されたことがわかった。静寂―これは、夢？

水の冷たさ、鼻につく油の臭い。死への恐怖が押し寄せた。

「子どもを残してここで死ぬな」と母としての強い意志が新山さんを動かした。「誰か助けて！」

力を振り絞って叫ぶ。声が届いた。近くの屋根から現れたのは偶然にも夫だった。夫に引き寄せられ「助かったよ」と抱え込まれたとき、意識を失った。その晩は、空き家の2階で過ごした。生まれて初めての長い夜だった。

新山さんはその後、肺炎で8日間入院。奇跡的に家族全員無事だった。娘は下校途中、すぐに高台にある中学校へ引き返していた。家族の安否が分からず、不安な一夜を過ごした。しかし、先生が「絶対無事だから、大丈夫」と、力強く励ましてくれたという。

延期となった娘の卒業式は同月21日に開催された。卒業式を終えた後、新山さんの故郷・十和田市へと向かった。

あれから、1年。生活は一変した。家族と離れて暮らす日々。将来への不安。「これからのことはわからない。けれども、家族みんなが生きていることが支えです」昨日があつて、今日が来て―「今」を生きていることを実感するという。

「震災があつた事実。家族が助かった事実。忘れられない出来事です。震災を風化したくないです」と、語る。

新山さんは「今」を生きている。

